

飯田龍太の俳句

——第二句集『童眸』より——

太 田 かほり*

【要旨】昭和の俳壇を牽引した飯田龍太の死から二年が経ち、三回忌に合わせて山梨日日新聞社より『龍太語る』（平成21年2月25日刊）が刊行になった。その巻末に掲載された雲母用箋13枚を使った「八〇句 飯田龍太」と題した直筆に注目した。注意書きによると、龍太没後に発見された最後の自選句稿と断定されている。実際には87句が書き込まれ、選句・推敲途上のものと見られている。平成5年に発表された「自選150句」をさらに絞り込み、150句から外された句、加えられた句など、興味深い。この稿では昭和34年刊の第二句集『童眸』を中心に考察を試みるが、『童眸』からは6句が自選されている。『童眸』は龍太の次女純子の突然の死をはさんだ時期のものである。句集名については、生前に発行された全集などからも『龍太語る』からも龍太自身が触れたものを見つけることはできなかったが、わずか六歳で一夜にして急死した純子への思いをこめたものと推測される。『龍太語る』によると『童眸』は角川源義の熱心な依頼に応じて粗製濫造したとある。まず、第二句集『童眸』から最後の自選句稿「八〇句」に選ばれている6句の解釈と鑑賞を試みる。また、自選からは外されているがすでによく知られている名句を取り上げる。次に、純子の死およびその後を詠んだ句、そして広く子どもへの龍太の眼差しがうかがえる句を取り上げて解釈と鑑賞を試みる。最後に、龍太の弟子はじめ周辺の人々による追悼句について触れる。

一、最後の自選句稿「八〇句」より

飯田龍太の三回忌に合せて山梨日日新聞社から長男飯田秀實監修による『龍太語る』が刊行になった。その最後の章に雲母用箋に直筆で書かれた「八〇句」が収録されている。これは、没後に発見されたものである。十句集から合計87句が書き出されており、選句、推敲途上のものと考えられている。最後の自選句稿として重い意味を持つ。第二句集『童眸』より龍太が自選した6句を書き出された順にしたがって解釈と鑑賞を試みる。

大寒の一戸もかくれなき故郷

(昭和29年 34歳)

*教職課程センター／准教授

風景というものに品格というものがあるだろうか。風景に対して品位という表現ができるものだろうか。品格、品位とは人に対していわれるものであり、風景その他に対して使われるものではない。この句に詠まれた「故郷」は日本中のどこにも見られる風景である。一戸一戸が点在しつつ一つの集落をなしている所である。故郷といえば多くは田舎の風景の中に描かれる。懐かしさが第一の条件であり、親しみやすさや穏やかさなどが付随し、誰もが既知と感ずる所が故郷のイメージにあう。電線や電信柱など生活の必需品は許されるが看板やビルのような建物は故郷の概念からは外れる。山や川や緑が配分され概ね平面的に広がる町並みである。そうした故郷に合致する町や村がどれも品位を感じさせるかという、懐かしさや穏やかさや親しみやすさなど故郷の条件を満たす要素を持っていてもその言葉は浮かんでこない土地もある。現実に品格の感じられる故郷というものが存在するか否かは別として、龍太が詠む故郷には品格というものが宿っているように思う。いや、龍太が詠むことによって後から品格が備わってくるというべきか。それはどこからくるものだろうか。

この句に詠まれた光景は、高台から見渡した一村の全景である。数えようとすれば数えられる数の家が散らばったり、一塊になったりしている。一軒残らず视界におさまる。それぞれの家が高みからは露になっている。寒中の引き締まった空気のゆえか、一軒一軒が最小の無駄のない軒として、かつ、生活の必要を満たした集落として映る。第一句集名『百戸の谿』から百軒ほどの村が想像される。高みからは一見無防備にも見えるが、よく見れば手出しのできない強固な村のありさまが見えてくる。大寒という一年を通して最も厳しく凍てつく中に、故郷は、毅然として動じず、しかし、人々の生活の温もりを宿している。一度ならず都会の生活を経験し、予想外の事情で帰郷を余儀なくされるという作者の人生を合わせてみると、故郷は龍太の気持ちに常に寄り添うところであったとばかりはいえないだろう。煩悶する龍太に対して故郷の自然は惜しみなく懐を開き、その魅力を存分に見せ、龍太はしだいに故郷の自然に魅了されていったらう。故郷に暮らす人々、訪ねてくる人々がもたらしたものも多いだろう。龍太は、宿命の故郷を故郷とするにたる故郷として歩み寄り、そして、創造した。人のかかわり方によって品格を醸し出す風景というものが存在することになるのではないだろうか。それとも、龍太が詠めば風景に品位が備わることになるのだろうか。それが句風というものだろうか。第二句集『童眸』の巻頭の句であり、揺るぎない評価を得ている作品である。

雪の峯しづかに春ののほりゆく

(昭和29年 34歳)

山国甲斐は四囲を峻厳な山々に囲まれ、四季の移り変わりは山の表情に表れる。山々は容易に表情を変えるものではない。最も遅く季節を受け入れ、最も早く季節の顔を脱ぐところである。ことに春はゆっくりやってくる。峰々に雪を戴き、その上に広がる空の色を加味しなければまだまだ春の到来は見えてこない季節であるが、その春が山すそから静かに始まっている。春は、山すそからしだいに領域を広げながら急がずに山頂へと、あたかも水面が上がって

いくつかのように確かな歩みを感じさせながら、やがて、山全体を覆っていく。季節の勢力争いは「しづかに」進行していく。そして、いつしか次の季節へその座を明け渡す。過激でないこと、急変でないこと、突然でないこと、そうなるべき自然の運行に従った勢力図の交代を目の当たりにさせる。擬人法というにはあまりにも大きな手法である。堂々と覇を唱える雪嶺に対して柔らかく侵食していく春の大いなる力。その均衡の崩れの見事さ、繊細さ、確かさを格調高く詠んでいる。

溪川の身を揺りて夏来たるなり

（昭和 29 年 34 歳）

夏がやって来る。それぞれの季節はそれぞれの季節らしい雰囲気をもってやって来る。例えば、秋は、忍び寄るようにひそやかに。正月は、足音高く駆け足で、そして、土壇場で速度変更してゆっくりと。開放的でエネルギッシュな夏は、その足音もダイナミックである。例えばこのように観念的にあるいは常套的に比喩を用いて季節の到来を言いがちである。龍太はどうか。龍太は自らの目と耳で四季の変化を捉える。目に映るもの、耳に届くものから少しずつあるいは大きく変わるものを認める。身ほとりはふるさとの豊かな自然に包まれている。この環境が龍太作品誕生の力ではないだろうか。川下の平野や巷間を流れる河川のその源になる上流あたりが龍太の日常の生活圏である。流れるのはまさに清流、冷たく澄んで汚れない水がほとぼしる。たっぷりの水量を擁して川そのものが生き物の力を宿すかのように身を躍らせながら勢いよく流れてくる。起伏に富んだ上流の地形は川を躍動させる。その川に重なるように本格的な夏が名乗りを上げながらやって来たのである。季節の勢いを川の流れに認めたのであるが、四季折々にこの川を眺めながら生活するところから生れた句であることは言うまでもない。自然の推移の中に日常があるということが龍太の名句誕生の土壌であることを感じる。

満目の秋到らんと音絶えし

（昭和 29 年 34 歳）

見渡すかぎり秋が広がる。野山の一木一草ことごとく、鳥獣や虫の類もすべてが冬に入る直前の姿を見せて、秋という静かな華やぎの中で完結に近く、完璧に近く、季節の到る先の最も美しく荘厳な姿を惜しげなく露にする。満目蕭条という言葉があるようにこの句の季節の次にくる冬枯れの眺めにはただ荒涼とした寂しさばかりが広がるのだが、秋が到ろうとするこの句が詠み留めた時空には、完成すなわち熟しきったものがはらんでいる花がある。花というべきか、他に言葉が見つからないが、これとは指し示せないものが漂っている。駄文を弄すれば、到りついたものがもし出す一色ではない複雑な色が融合しあって、なるべくしてあるいは偶然に表れ出た色彩が織りなす深い調和といえるだろうか。絵に描いても俗に堕ちやすく写真に撮っても絵葉書的になりやすく、究極の秋の味わいをありのままに描き出すことは難しく、神の采配による美しさは目で見ることに、心で感じることに優る手段は見つけがたい。ただ、言葉

だけは、人々の経験という記憶の蓄積を呼び起こし、そこに想像を加え、あらたに創造することができる。この句の「音絶えし」が読者の創造力を刺激する。冬はむしろ音を蔵しているものであったかという発見もある。いや、冬は吹きすさぶ風からして風景に音を加える。到りついたものの静けさの発見である。秋景色の絵や写真が感動に乏しいのは、そこに饒舌すぎる音を感じていたからではなかっただろうか。これら音を映すことのないものから漏れてくる雑音が感動を薄くしていたのではないだろうか。最も視覚的に感じる秋のあの言いようもない情趣は音を消し去ったところに広がっていたのであったか。

秋冷の黒牛に幹直立す

(昭和30年 35歳)

黒々と盛り上がった牛の巨体が風景の大半を占め、その存在を以て辺りを鎮めているかのようである。黒の持つ重量感が辺りを押し、季節の冷ややかさとともに空気を引き締めている。風景は牛によって横方向が塞がれ、直立する樹木の幹によって縦方向に分けられる。樹ではなく幹としたことで点景ではなく幹が牛とともにクローズアップされる。「直立」は樹木がその全体ではなく地面に立っている牛が視界に収まる範囲に切断する。つまり、牛の黒々と大きな塊とそれに釣合う太さの幹の一部が描かれた構図である。直立する幹に対して生き物である牛は動くが、牛の鷹揚な動きには威厳のようなもので備わって感じられる。不動に近いこの構図を凝視しているうちに、深まった秋の冷や冷やとした風景とその中に息づく体温を持つ生き物の温もりとのバランスに気づく。

晩年の父母あかつきの山ざくら

(昭和33年 38歳)

「晩年」と「あかつき」が相反するイメージを広げる。普通には晩年には「たそがれ」が似つかわしく、あかつきには青少年がふさわしい。父母のことは、癖や仕事や一挙手一投足にいたるまで見るともなく見てこまごまと記憶の中に蓄えられているものである。それは始終共にいたということの結果として記憶に残るものである。若き頃の両親の記憶は幼かった自分の年齢に見合った活動的なものとしてよみがえってくるが、しだいに年老いて晩年に到った頃の立ち居振る舞いは見るのも思うのも疼くような感情を伴う。この句が詠まれた時点で作者の両親すなわち飯田蛇笏、菊野は健在である。しかし、子としての作者の目には晩年に入った親の姿が若き頃とは違ったものとして映っている。晩年とは抜き差しならない事態である。死は必ず訪れる。避けがたい切れ目である。その予感の中で父母の命を見る。時に傍らで、時に真正面から、その姿を見る。そして、直視に堪えない感情に襲われる。そうした感情を身の内に潜めながら、晩年の父母にあかつきが訪れ、その目に山桜が美しく清々しく映じる静かな時間をこの上もなく慈しむのである。昭和三十三年の作、父蛇笏の死は三十七年、母菊乃の死は四十年である。父母の死後の悲しみを詠んだ龍太のしみじみとした名句の数々はよく知られるところ

である。

以上の6句は龍太最後の自選句稿として第二句集『童眸』482句から選び出されたものである。いずれも居を定めた故郷の四季と自然を詠んだものである。龍太の言葉である「他郷を故郷のように、故郷を他郷のように」は、多くの俳人の座右の銘となっているが、故郷山梨県の慣れ親しんだ豊かな自然の中であって四季の変化を新鮮な感覚で捉えた名句である。ある時は不動の故郷、ある時は躍動する山河に透徹した眼差しを向け、広大な規模の対象を大きく詠じている。あるかなきかのかすかな自然の気配に心の耳を澄まし、確かな時の移ろいを言葉に定着させる。読者は、龍太の句によって自然とはこのようであったかと認識することにもなる。そして、そこに人々の息づきを感じてほのほのとした気持ちに包まれる。龍太の故郷を自分の故郷のように錯覚し、自分の故郷を前にした時には龍太の故郷を重ね合わせる。「他郷を故郷のように、故郷を他郷のように」は句作の作法にとどまらないものがある。

二、自選「一五〇句」より

1993年3月号の「俳句研究」に飯田龍太自選150句が掲載されている。第二句集『童眸』からは最後の「自選八〇句」中の5句と合わせて11句が選ばれている。この11句には漏れ、「八〇句」に選ばれているのは、〈満目の秋到らんと音絶えし〉の1句のみである。次は「八〇句」には外された6句である。

春暁のあまたの瀬音村を出づ	(昭和29年 34歳)
月の道子の言葉掌に置くごとし	(昭和30年 35歳)
枯れ果てて誰か火を焚く子の墓域	(昭和32年 37歳)
雪山を灼く月光に馬睡る	(昭和32年 37歳)
高さ燕深き廂に少女冷ゆ	(昭和32年 37歳)
裸子にかすかな熱の竈口	(昭和33年 38歳)

これを見ると、すでに人口に膾炙している作品が外されているのであるから自選とは実に厳しい作業であると痛感する。特に前の3句などは龍太作品を語るに欠くことのできない名句中の名句である。〈月の道子の言葉掌に置くごとし〉は、ほのほのと温かく親しみやすい。〈枯れ果てて誰か火を焚く子の墓域〉には、逆縁という非情の経験に対して読者の感想を憚らせるものがある。言葉少なく悲しみを詠う。読者は目を伏せるしかない。龍太は自選句を選ぶに当たって自らの悲運を削除し、読者の誰からも正面からの批評に耐え得る作品を選んだといえよう。三人の兄の死によって蛇笏の後継者になった事情も、六歳の次女を急死させた運命も、その個人史を思わせる作品は選んでいない。戦死も病死もある意味で時代の特殊性による。戦

争がなければ、医学がもう数年進んでいたならば、龍太の生涯は違っていただろうである。龍太は自作の中でも自然を対象にした季節の歌をより高く評価した。最後の自選句稿 80 句はどれもいずれ劣らぬ後世に伝えられる名句で占められている。ただ、人事句に入るものとして父母を詠んだものは別である。老いた両親や故人となった両親を自然の一部のように眺め、しみじみと心打つ作品が自選されている。二親とは誰の人生にも普遍的な素材であるということではないだろうか。俳人飯田蛇笏ではない父飯田武治を詠んだ故に読者の心に深く染み入る作品となっているのではないだろうか。

次に、第二句集『童眸』から自選 150 句に選ばれ、自選 80 句からは外された 6 句の中から直接には次女純子にかかわらない内容の句を取り上げる。

春暁のあまたの瀬音村を出づ

(昭和 29 年 34 歳)

第一句集『百戸の谿』には、やむなく帰郷、そして定住を選択しなければならなかった無念とも諦念ともいえる心情がうかがえる作品が多く見られた。近隣を疎み、自嘲する気持ちが露に出ている作品も散見される。志を抱いて都会に出た青年の挫折を時の流れや故郷の自然や人々が癒していったことを第二句集『童眸』の読者はやがて認めることになる。

この句について「村を出づ」に村を出ることの叶わない身の上を重ねて鑑賞する向きがあるが、もはや、龍太に、その嘆きや恨みはなかったと考えたい。確かに春は大志を抱いて郷関を出る季節である。かつてそうであっただろうし、そういう青年を村の内にも幾人かは数えただろう。第一句集『百戸の谿』には次のような句がある。

野に住めば流人のおもひ初燕

(昭和 24 年 29 歳)

露の村墓域とおもふばかりなり

(昭和 26 年 31 歳)

露の村恋ふても友のすくなしや

(昭和 26 年 31 歳)

親しき家もにくきも茂りゆたかなり

(昭和 27 年 32 歳)

闇暑しことに隣家をおもふとき

(昭和 27 年 32 歳)

梅雨の月べつとりとある村の情

(昭和 27 年 32 歳)

農に倦み花栗にほふセルの夜

(昭和 24 年 29 歳)

百姓の昼寝熊蜂梁を打つて去る

(昭和 24 年 29 歳)

百姓に翳の想ひや秋しぐれ

(昭和 27 年 32 歳)

百姓のいのちの水のひややかに

(昭和 28 年 33 歳)

百姓の冬の洗面大きな音

(昭和 28 年 33 歳)

これら赤裸々な心情の吐露に対して〈春暁のあまたの瀬音村を出づ〉は比べようもなく清澄な響きを持つ。身を置く農村は生まれ育った故郷であり、以後長く生活する場所となる。その認識なくしてこのように清々しい句は生れない。自然と共に明け暮れる生活の中に豊かさや穏やかさを感じ、それを幸せだと思うところからこの句は生れたものだろう。故郷はすなわち

自然である。口を糊する手段も文芸の対象もそこにある。この両者の均衡の上にこのような静謐な句境を得たと考える。

春はどのような所においても待たれる季節である。その訪れは聴覚からもやって来る。雪解けによって川は水嵩を増し、春の水が村全体を潤していくように感じられる。村を流れる幾筋もの川が瀬を持ち淵を持つ。ことに浅瀬の親しみやすさは格別である。まだ明け切らず、ほのぼのと明けようとする時刻の刻々と色を変えていく空の美しさに瀬音が伴奏を加える。一村を潤して流れ、流れて次の村へ、そして次の村へ、さらに次々と流れをつないでいく。作者は村にとどまって流れゆく先を広々と展望する。もはや心までは流せない境地で流れゆく水音に耳を傾ける。やがて太陽が昇り、浅瀬を流れる水がきらきらと光り出す。水とも光とも分ちがたく美しい。

昭和 29 年の作には故郷の川を詠んだ次の句がある。

- | | |
|----------------|----------------|
| 冬の村無韻の水瀬つらぬきて | (昭和 29 年 34 歳) |
| 冬川の生身ながるる新市街 | (昭和 29 年 34 歳) |
| 白昼の一路を距つ雪の川 | (昭和 29 年 34 歳) |
| 岩々の肥えかがやきて春の水 | (昭和 29 年 34 歳) |
| 溪川の身を揺りて夏来たるなり | (昭和 29 年 34 歳) |

これらのどの句からも定住者の落ち着いた眼差しが感じられる。

- | | |
|-------------|----------------|
| 高き燕深き廂に少女冷ゆ | (昭和 32 年 37 歳) |
|-------------|----------------|

燕は春の季語、冷ゆは冬の季語である。高くと深き、燕と少女が対比され、冷ゆだけが季節にそぐわない。高く低く人家に近く飛び交う燕の様子は誰にでも親しまれる季節の風物である。勢いよく軒先や廂近くにやってきて巣を作り子育てをする。だが、廂の深い家の最も奥まった冷え冷えとしたところ、それは仏間をイメージさせるが、体温を持たない少女純子が冷たく横たわっている。やはりそのように解釈せざるをえない。

- | | |
|-------------|----------------|
| 裸子にかすかな熱の竈口 | (昭和 33 年 38 歳) |
|-------------|----------------|

夏の日中の一時、あまりの暑さに幼子を丸裸にして放す。裸をうれしがってはしゃぎ、べたべたと自らの身体や辺りのものを叩いて喜ぶ。板の間の板など冷たいものに擦り寄ると心地よいのだが、ほんのりと余熱を持つ竈に歩み寄ってその温もりに親しさを覚えたらしい様子である。子どもの柔肌と硬質な竈口をかすかな熱がつなぐ。昭和 33 年、まだ竈が健在であったころの木造家屋の奥の奥に設えられた土間の光景である。

三、病臥一夜——次女純子を失う

1、月の道

『童眸』に収められ、広く愛唱されてきた句に次の作品がある。

月の道子の言葉掌に置くごとし

(昭和30年 35歳)

まだ宵の口だろう、我が子の手を引いて帰途につく。東の空に月が昇り、一筋の村道を明るく照らし出している。父と子のシルエットが影絵のように浮かび上がっている。父の手にはおさな子の手が、おさな子の手には父の手がある。親子に体温の温もりが通い合う。子がぼつりとものを言う。ぼつりと父が応える。子の言葉が父の心を潤す。昭和30年の作であるが、この頃は日常にまだ着物を着ていただろう。下駄履きだっただろう。月に照らされて大きな影と小さな影が地面に落ちる。「四人いるね」と言ったかもしれない。「四人いるね」と繰り返しただろう。「二人だよ」とは父は訂正しなかつただろう。「うさぎさんがいるね」と言ったかもしれない。「うさぎさんがいるね」と子の言葉をなぞっただろう。「餅つきだね」「そうだね」と続いたかもしれない。父は一言一言を呟き返し、子は次々に想像を広げていく。子どもの言葉の一つ一つが子どもの発見した詩である。その言葉を父が反芻する。掌に乗せて愛してみたいような詩の断片のような美しい言葉である。家までのそれほど近くはない道のりは、そんなに遠いという道のりでもない。だが、月夜の道がどこまでも続いてくれるようにと読者は願う。読者は幼い自分と若い父、若い自分と幼い我が子の姿を重ね、人生のとある短くも美しい一時期を宝のように回想する。昭和というこの時代の若い親子の一場面は、郷愁の風景として平成の読者の心に響く。

龍太に子どもの句は多い。

幸福肌にあり炎天の子供達

(昭和31年 36歳)

真夏の太陽の下、魚になり虫になりして子ども達の真っ黒に日焼けした肌が光る。水辺に遊ぶ子らの肌は一際美しく逞しい。その黒さは子の日々の健康具合を物語る。黒いほど元気がよく、元気のよさはさらに肌の色を輝かせる。これほどの黒さは丈夫の証、これからも続く暑い暑い夏の間に強靱な肉体が育まれていく。幸福とはこの肌にあるのではないか。露になった子らの肌から生命の力がほとばしる。

野路夕焼幼児と西瓜等量に

(昭和31年 36歳)

境川村の野道を夕日に向かって帰っていく。帰る先が真っ赤な夕焼けの中でもあるかのよ
うな風景である。今日一日の晴天を思わせ、明日の晴を予告するダイナミックな風景の中にメ
ルヘンチックな画像が浮かぶ。麦藁帽子を被った若い親子である。父は傍らに子どもほどもあ
る大きな西瓜をぶら下げ、もう一方に西瓜ほどの幼児をいざなっている。西瓜と子どもが均衡
を保つ。西瓜といとし子という比べるべくもない二物をあえて等量と見立てる。それを第三者
の目で眺めて少し笑う。二つの幸せ、いや、夕焼けを加えると三つの幸せを我が物にする。い
やいや、すべて満たされた満点の幸福の中に親も子もいる風景である。

以上の三句は次女純子を詠んだものとは言い切れないが、たとえそうでなかったとしても純
子の面影がよぎるのはいたしかたないことであろう。純子を失った作者龍太はむしろ純子の姿
をこれら幸せな親子に重ねたかったかもしれない。龍太の詠んだこれら幸せな子ども達は龍太
の実の子ども達であり、同時に時代を超えてわれわれ日本の子ども達である。

突然、龍太に大きな不幸が襲いかかる。子を亡くするという悲しみは多くの人々にはしなく
てすむ経験である。それほどの痛みを経ることなく大方の人生は閉じられる。だから、子を亡
くした親の思いに迫ることは困難である。ただ、文学とは例えば男が女を、女が男を描く世界
である。経験のないことは分からないという逃げ道はない。及ばずながら最も不幸な父親に近
づいてみることにする。

小林一茶は生後四百日で次女さとに死なれた悲しみを〈露の世は露の世ながらさりながら〉
と詠んでいることはよく知られている。稚い子を亡くした辛さを「露の世」を繰り返して嘆き、
悶え、身も世もない様子で絶叫する。悲しみのどん底で声をかぎりに悲しいといった一茶に人
間らしさを見る。親の子への深い愛情を見る。それは多くのファンを獲得した。

さて、龍太であるが、おそらく一茶のこの句は去来しなかっただろう。

2、滅後の色

露の土踏んで脚透くおもひあり

（昭和31年 36歳）

「九月十日急性小児麻痺のため病臥一夜にして六歳になる次女純子を失ふ」という前書がつ
く。死の前後を記した龍太の文章の中でも、純子の棺を前にした祖父蛇笏の号泣の様子は殊に
哀れである。孫娘の死の前に時代は蛇笏を厳しく苛んできた。戦争は蛇笏の二人の息子を奪い、
また時代はもう一人の息子の若い命を奪っている。その三度の悲運を当時の大方の家族が耐え
忍んだように一滴の涙も見せなかった蛇笏であったが、幼い純子の亡骸はその蛇笏をして号泣
させている。龍太がその父をどのように見たか、これほどの父の身を切るような嘆きを目の当
たりにした龍太は、もはや自らの心情を散文にすることを考えさせなかったのではないだろう
か。龍太の筆による蛇笏の描写はこの一文を読む者に対して家族というものの情愛の深さ、尊

さを深く印象づける。『童眸』の中の「滅後の色」と題した12句は純子の死後を詠んだものである。句集名が父龍太から娘純子への追悼にほかならない、と考える理由である。

季語「露」には万感の思いが託されている。露は味わい深い日本文化の伝統を背負った言葉である。露の命、露の世に代表される通りはかなさをイメージさせる言葉である。季語も時代にそって進化するものであるが、本意のはかなさにはかない故の尊さや美しさという意味が加わり、さらには露の雫が凝縮した強靱な美という意味も含んだ言葉へと歴史を経てきた言葉である。

朝露となく、夜露となく、草に結ぶ露ともなく、葉末の露ともなく、子を亡くした龍太の宇宙がただただ露に覆われ、見るにつけ、聞くにつけ、思いははかないこの世の定め、その不条理さへと向かう。おびただしく露が降りた地面に脚をつけ、土を一步踏み、しつとりと身も心も濡れそぼつ。露に濡れるという浄土がかすかな癒しであったか。汚れなく美しい露よりほかに目には入らなかったのではないだろうか。それゆえに露の降りた地面に立って自分の脚が透くと感じたのではないだろうか。透くは透明すなわち混じりけのないものを連想させる。露の清らかさが龍太の脚そのものになる。それは純子の赴いた浄土に近づいた感覚ではないだろうか。しかし、ほんの少し近づけたように錯覚させられただけで現実との境を踏み越すことはできない。「おもひあり」はこれだけ切り離して解釈する。亡き純子を思うというだけでは到底言い表せない重たく切なく苦しい思いがあると心中を吐露する。しかし、露ははかなくも美しく心を潤すものでもある。「おもひあり」と思う心に亡き子と手をつないで歩いた月夜のこと、片手に西瓜を持ち片手に子の手を持った日のこと、日焼けして健康そのものだった夏の日のことなども忍び寄っていたことだろう。今も美しい記憶である。「おもひあり」に一色でないさまざまなものを重ねて鑑賞した。

実際にこの句は、「踏んで脚透く。おもひあり」か「踏んで、脚透くおもひあり」か。後者の比喩をとらず、前者で解釈し、「おもひあり」に重心をおいた。

句集『童眸』は、制作年次毎に収録され、一年分はさらに「雪の家」「雲の信濃」などのタイトルが付せられている。この句は「滅後の色」という題の中に収められているが、それは純子亡き後の色なき色すなわち透明な露の色を思わせないだろうか。

花かげに秋夜目覚める子の遺影

(昭和31年 36歳)

花は供花である。赤い花を交ぜておいただろう。女の子が好きな色を添えて供えただろう。どの花もどの色もおさな子の死を飾って淋しい。棺に付き添って夜を明かす。夜が明ければ亡骸との別れが来る。すでに秋の気配。夜長の秋の切ないこと。日本人が愛でる趣深い秋の夜が悲しみにくれる親を苛む。遺影というあらぬところに納まってしまったまだ年端のいかない我が子を正視できない。写真を撮ったその時の愛らしくいとけなく無垢な少女。健康そのものだった我が子。まだまだその記憶が新しく、遺影という事実が肯えない。「なぜ」と子は問う

ただろう。「なぜ」と親も問う。なぜ遺影の中にいるのかと、双方が問答しあう。顔がゆがむ。我が子が泣く。自分が泣く。遺影という虚構に話しかけ、もどかしい隔たりに泣く。触れた温もり、抱いた重み、よみがえらないそれらが亡き子の親を鞭打つ。

抱かれ来て亡き姉の辺に置く林檎

（昭和31年 36歳）

この時、長女公子十二歳、長男秀實四歳。わずか六歳の幼い姉の枕元に抱かれて来たのはさらに幼い弟である。四歳の子に死の意味が分かるだろうか。いつもとは違う家の中、人の動き、ただならぬ気配、何より横たわっている姉が動かない、目覚めない、ものを言わない。父が泣く、母が泣く。誰の目にも涙、誰も笑わない。言葉もない。「抱かれ来て」は稚けなさを表す。稚けない姉と稚けない弟。幼い純子の亡骸に幼い公子、秀實が付き添っている様子などそう簡単に描けるものではない。非現実的であり、映画か小説の場面のようなものである。色を取り去ったモノクロの場面に赤い林檎が置かれる。弟の手から姉の枕元へ、甘酸っぱい香と鮮やかな色が置かれる。命ゆたかな女兒にこそ最もふさわしい果実である。健やかな紅い純子の唇に触れてこそこの林檎である。「おねえちゃんにあげるよ」以外の意味はないだろう。死者に供える、手向けるなどが理解できない子どもの仕草がこの場面の非情さを物語って悲しい。

金魚さはやか葬後雲ゆく子の泉

（昭和31年 36歳）

「葬後」を除けば健康な子どもの世界である。一夏、純子を喜ばせた夏の金魚は、秋に入ってから元気がよい。水辺は子どもの遊び場、金魚に興じていた純子が今もそこで遊んでいる。純子がいなかったことを除けば世界は爽やかな秋である。雲もまた在りし日の純子が指差した一つである。筋雲だろうか、鯛雲だろうか、雲は純子の世界を広げる一つであった。そして、泉は清らかな少女を象徴するかのような場所である。今となっては精神の世界に映る。気がつくとき純子の姿を無意識に追っている。金魚も、雲も、泉も、亡き子をしのぶよすがである。この句は一連の純子を追悼する作品の中に置かれて俳句としての話題に上らない作品であるが、亡き子をしのぶ風物を羅列せずにはいられない親の心情を汲み取ることができる。

父母を呼ぶごとく夕鴉墓に揺れ

（昭和31年 36歳）

鴉の声は鶯や時鳥が日本の詩歌文芸に貢献してきたようには情趣深いものとされていない。百舌と表記すればかしがましく鳴きたてて耳を刺激する悪声をイメージする。晩秋の頃、それも夕暮れ時にはしわがれた鳴き声が季節の深まりを感じさせてわびしさを募らせる。耳にざらつく声である。幼い子どもの愛らしい澄んだ声の響きとはおよそ似つかわしくないものであるのだが、その子があらぬ世界で泣きながら父母を探し求めているとすれば、叫びに近く絶叫に

も似て鴝の声に重なるだろう。決して抱き合えない隔たりの彼方から亡き子が自分を求めて喘いでいると親は思うのである。直接的な悲しみの表現が読者の心を打つ。日常の生活の圏内に墓地はあり、墓はすぐそばの距離であるのだが、そこに行ったとしても声は行っただけの距離をまた離れて遠ざかる。墓地の方角から鴝の声が聞こえてくる。それはまちがいなく父である自分と呼ぶ純子の声である。空をかき筆りながら懸命に呼び寄せようとする純子のいたいけな姿が見える。だが、そこに一步も近づけない。

近む瀬音弱灯に暁ける子の手足

(昭和31年 36歳)

俳句は省略に尽きる文芸であるが、五七五の間を埋める言葉がたやすくは探し出せない句である。瀬音、弱灯、子の手足をどのような言葉でつないで説明してよいものやら。だが、子を亡くすというどん底の悲哀の中でその本人が理路整然と自らの心中を語れるわけがない。句集を編むに当たって外せなかった心中を尊重したい。

露深み来て少年の匂ひ消ゆ

(昭和31年 36歳)

露も少年もともにはかない存在である。存在という重々しい言葉が不似合いなほどその実態はかすかである。露は言うまでもなく朝日を待つまでもない短い命である。少年は人生のある一時期をさして呼ぶが、同じく短期間に過ぎてしまう幼年期に比べると幼年期は愛らしさを以って、少年期は繊細な美しさで以って区別できるのではないだろうか。少年期にはさらに壊れやすいというイメージが加わる。露のようにしっとりと潤う美しさ、少年の一瞬の光のような美しさ、それが消えたという意味を託した句だろうか。

子の声と翡翠のゆくへ澱みなし

(昭和31年 36歳)

翡翠は溪流の宝石とたとえられる鮮やかな水色の鳥である。くちばしが長く、頭が大きく、首、尾、足は短く、姿そのものは八頭身とはいかない子どもの身体のバランスを思わせる特徴をもつ。水面近くを素早く直線的に飛ぶ様子も敏捷な子どもの動きに重なってくる。水辺に元気な子どもの声が響く。チー、チーと鳴いて翡翠も飛ぶ。水中に飛び込んで獲物を捕らえる。視界から消えて、また、現れる。澱みなく清らかな時間が流れていく。とある日の在りし日の映像である。

暁の月あからみて落つ蛾のかなか

(昭和31年 36歳)

不気味な情景である。宵の月ではなく明け方の月であり、赤みを帯びてどことなく不吉なも

のが漂う。文芸では残月を鑑賞した時代もあるがいつしかその風習は廃れた。和歌には来ぬ人を待って見上げる有明の月、箏曲には門人の娘の死を悼んだ「残月」があったりする。やはり連想は切なく暗い。蛾も愛されない一つである。夜行性の蛾は夜明けにはしだいに力をなくしていく。無邪気な純子を偲ぶには蝶がふさわしいが、そんな純子の面影を邪魔だてする光景である。

遊園地大人ばかりの笑ひ灼く

（昭和 31 年 36 歳）

遊園地から子どもが消えた。純子を遊ばせた遊園地から純子の姿も声も消え去った。その場所で親は探すだろう。いつまでも戻ってくるのを待つだろう。遊園地に最も自然な子どもの姿と声が消え去り、残ったのは不自然な大人たちとその声ばかり。子の手をひかない大人など遊園地に存在するわけがない。子を伴わない大人が笑うわけがない。最も必要なものを欠いてしまった遊園地の空疎感、子を亡くした親の喪失感や違和感を詠んだ。

雷の嶺ベッドのごとく汽車に臥て

（昭和 31 年 36 歳）

情景がつかみにくい句である。雷の音、山の嶺、汽車の中が容易に実像を結ばせないが、不気味さ、不安などを感じさせ、やはり、純子亡き後の心象を想像させる。

薔薇園はるか没日の松林

（昭和 31 年 36 歳）

平成 17 年に角川書店より『飯田龍太全集』全 10 巻が発刊になった。第 1 巻と 2 巻は俳句、3 巻と 4 巻は随想、5 巻と 6 巻は鑑賞、7 巻と 8 巻は俳論・俳話、9 巻は作家論、10 巻は紀行・雑纂を収める。龍太は随筆の名手として知られているが収録されている中には純子の死の前後を記したしみじみと心打つ名品がある。この一篇を以って深い肉親の絆で結ばれている飯田家の全容が伝わってくると感じるのは筆者だけではないだろう。純子と龍太、純子と蛇笏、蛇笏と龍太、すなわち飯田家の家族の情愛が抑えた筆致の中から香ってくる。それは日本人の普遍的な家族像であるのかもしれないが、逆縁という大きな不幸の中でこれほど温かい涙を読者に強いる文章はないのではないだろうか。蛇笏といえば俳壇史の大御所である。龍太といえば時代の最高峰である。この二人の巨人が幼い家族を亡くするという悲しみ中で見せた剥き出しの魂に読者は深く感動させられる。それは蛇笏だからというわけでもなく、龍太であるからというわけでもなく、人間としての姿に対する身震いするような感動である。筆者はこの部分を朝の通勤電車の中で読んでいたが、下車駅を通過しても次の行動が取れなかったことをよく覚えている。次に引用する。

『純子は翌年四月、小学校に入学することになっていた。すでに色鉛筆や図画帖、運動靴までひとつおそろえであった。

納棺の時、親父がそれらを一つひとつ手にとって納めた。それまで一滴も涙を流さなかった親父が堰を切ったように号泣した。親父が涙を見せたのは一生涯で、この時一回だけだった。』

蛇笏はそれまでに龍太の兄に当たる息子三人を戦争や病気で相次いで亡くしている。その時代の多くの家族を襲った悲劇であるが、それらの死をどのように耐えたのであつたらうか。号泣する蛇笏から逆に泣けなかった蛇笏を思ってみる。四男である龍太の人生を変えた兄たちの死である。龍太の蛇笏への思いは、俳句作家蛇笏への尊敬とともに父蛇笏への愛情も並ぶものであつたらう。蛇笏の息子であることへの小学校時代の抵抗を記した微笑ましいエピソードや、句会で蛇笏の特選を取った時の双方の気まづいような照れのような場面などがあるにはあるが、師弟であり親子であるという関係は随筆などの素材として多くは登場しないところに龍太の節度を見ることができる。

もう一箇所引用する。

『亡くなる一週間前、純子は蛇笏に手を引かれ、石和の小松遊覧農場に薔薇園を見に行つた。咲き乱れる薔薇の中を二人で歩いて回つた。

小松遊覧農場で蛇笏と純子は二人でお猿の電車に乗つたり、木陰でソフトクリームを食べたりした。その時撮つた写真が今も残っている。

薔薇園一夫多妻の場をおもふ 飯田 蛇笏

親父の代表句の一つになっているが、純子と薔薇園を見た時に作つた。』

そうした経緯があつて〈薔薇園はるか没日の松林〉の句が詠まれている。

元気な純子を最後に喜ばせ楽しませた薔薇園は子を亡くした後の龍太にとって感謝の念さえ催す所となつていったのではないだろうか。同時に新たな涙を誘う場所でもあつたことだろう。死の直前、たつた一週間前の健やかな純子を健やかに遊ばせた薔薇園である。幾たびも思い出しては龍太の頬に微笑が浮かんだらう。走つたり、しゃがんだり、跳ねたり、触つたりする純子百態が薔薇園には残されている。母でもなく父でもなく祖父に手を引かれている純子の愛らしさは、あまりにも短い六年の生涯の幸せを象徴するかのよな絵柄である。また、読者は蛇笏の一面を垣間見て飯田家の全体像を補足することができる。蛇笏の句業とは別にその人となりへの理解への補助線を引くことができる龍太の随想である。

3、枯れ果てて

枯れ果てて誰か火を焚く子の墓域

（昭和 32 年 37 歳）

切ない句である。時間は流れ、季節は巡り、秋から冬へ、純子の眠る墓の辺りも一面枯れ果てて寂しい風が吹き渡る。墓地はいつそう寂しい。言うべくもなく寂しい景色の中に我が子が眠っている。いったい子を亡くした親はどのようにして生きていくのだろうか。枯れ果てた墓地の情景はそのまま子を亡くした親の心象風景であろう。枯れるだけ枯れて、枯れ切って、すべての色が消えた世界にぼつねんとたたずむ。悲しみの行き着いた先の風景に見えるが、これ以上もこれ以下もないすなわち癒えることのない悲しみ、埋めることの不可能な喪失感が幾重にも襲い掛かってくる。ふと、誰かのかすかな気配を感じる。火を焚く誰か。ゆかりのない誰かが我が子の墓の見える所で火を焚いている。時折ゆらぐ炎と立ち上る煙。人の気配がうれしいと思う。赤い色が純子を喜ばすと思う。同時に茶毘に付した日のことがよみがえる。炎も煙も我が子が再びこの地にもどらないことを思わせる。しみじみと切なく、限りなく悲しい。

この句は純子の死から一年後の作であるが直後に詠まれた「滅後の色」の心情がさらに深まって感じられる。なお、龍太の文章には「一生子どもの死の影がつきまとっている」と書かれることが多いことを龍太自身が語っている。

風ぬくし旅半ばより亡き子見ゆ

（昭和 32 年 37 歳）

「温風——信濃旅情 外」という題のついている中の一句である。「ぬくし」は冬の季語とされ、寒気が緩んでふと感じるほのかな温さである。悲しみにも緩急がある。亡き子を心に浮かべることが温もりをもたらす。まだ冬のことであるからそれは長く続くものではないが、一時的にしる亡き子に慰められる折々も訪れる。時は流れる。「見ゆ」は見えるという古語であるが、見ようとして目を凝らすのではなく亡き子が悲しみの親の前に現れ出たのである。生ける親と亡き子を隔てる距離が違った段階に入ったことを思わせる。「旅半ば」は旅情が募る頃であるが、亡き子を道連れの旅にしばし慰められたのだろう。

湯の少女臍すこやかに山ざくら

（昭和 32 年 37 歳）

山の宿だろうか、山桜の下で湯浴みをしている少女の健康な五体が輝く。臍は命の根源である。成長していく先が見えて心がときめく。物語の光源氏が桜の咲く北山で美少女を見つけた場面などが重なってくる。亡き純子の姿が重なり合う。

秋空にひとり日暮れて一周忌

（昭和 32 年 37 歳）

「帰京の機中ひそかに亡児を思ふ」という前書がある。北海道からの帰途の作である。稚い我が子の死がもたらした怒涛のような日々が365日も過ぎた日の句である。せめて「ひとり」であることがこの日の作者にとって、子を亡くした若い父親にとってどれほど幸いであったことか。それにしてもその日一日、その日もそのようであった「秋空」が泣けとばかりに澄み渡り、やがておもむろにやはりもっと泣けとばかりに日暮れていくという自然の運行が心にしみて悲しい。取り返せない命を思っ泣く。泣きに泣いた蛇笏の涙を思っ泣く。こんなにも静かな一句に一族の深い悲しみを読者もともに反芻し心萎れる。この句については、機上から見た夕陽が実にきれいだったこと、三好達治が「あの句はいい」とほめてくれたことを後に回想している。

昭和33年2月には次男恵二が誕生している。

胎の子にはるかな雪の没日さす	(昭和33年 38歳)
胎児やすらか赤く重たく冬日浮き	(昭和33年 38歳)
春風のゆく青空に子の名置く	(昭和33年 38歳)
育つ子の掌や極寒の一夜明け	(昭和33年 38歳)

これらの後に次の句が置かれている。

冬の海てらりとあそぶ死も逃げて	(昭和33年 38歳)
-----------------	-------------

若き父龍太は次女純子に死なれ、新しく次男恵二を授かる。純子の死がその後の龍太から離れることがなかったことは龍太の散文に「常に死の影がつきまどっている」と評されていることからもうかがえるが、そんな龍太をしばし遊ばせる時間と場所があった。とはいっても下五に「死も逃げて」と置かれると、やはり、純子の死がいつも離れないものであつことを思わせる。冬の海は暗く荒々しく、「てらり」という擬態語も何かしら不気味である。遊びながら遊びきれない。だが、遊ぶ。純子の死を抱きしめながら他の子を愛しむ。

そして、次の句が続く。

子を渡す寒夜のこころ解くやうに	(昭和33年 38歳)
姉の瞳の奥に冬空小鳥ゆく	(昭和33年 38歳)
墓に倦む児の両眼の莖草	(昭和33年 38歳)
裸子にかすかな熱の竈口	(昭和33年 38歳)

昭和31年に飯田家を襲った悲劇は36歳の龍太を打ちのめすものであった。純子の死ばかり

か三人の兄の死や周辺の死は暗い影を投げかけずにはおかないものだった。しかし、凶事の間
に慶事も交じり、甲斐の山々に囲まれ田園に居を据えた龍太の日常はしだいに穏やかなものへ
と移っていく。文化の中心大都会の東京からほどよく距離を置き、父であり偉大な俳人である
蛇笏と一つ屋根の下での暮らしは、文学的環境は望むべくもないものであったと思われる。龍
太はその生涯にわたって満遍なく名句を残しているが、最も厳しい自選においては普遍的な
大自然に目を向けたものを選んでいる。心揺さぶる人間性豊かな作品にも読者は強く惹かれる
が、個人史にかかわる句は父母を詠んだ句を除いては潔く格下げしている。龍太にはまず甲斐
の自然があり、そしてそこに息づく普通の人々の暮らしがあった。どの時代の誰の人生にも重
なり合う大きな自然とそこに根を下ろした暮らしへの共感が龍太作品の最大の遺産である。

四、龍太没後の人々

俳壇で最も権威のある賞は飯田蛇笏を記念して昭和 48 年に設けられた「蛇笏賞」である。
龍太はその選考委員を務めてきた。今年度第 43 回の受賞は飯田蛇笏および龍太に師事し、「雲
母」終刊後、龍太より「白露」主宰を託された廣瀬直人が受賞した。廣瀬直人は長らく「雲
母」の編集に携わり、龍太の信任きわめて厚い人物である。また、龍太の一周忌、三周忌には
数多くの献句が詠まれている。次に、それらの中から取り上げる。

1、蛇笏賞受賞廣瀬直人句集『風の空』より

瞑目といふ別れある弥生かな	廣瀬 直人
境川村小黒坂いつか夏	〃
全景の村の月の出龍太の忌	〃

一句目。「瞑目」とは目をつぶること、安らかに死ぬことをいい、「瞑目といふ別れ」は
死別を意味することになる。考えを巡らす時、祈る時、眠りに就く時などに人は目をつぶる。
それは再び目を開けることを前提とした概ね静かな行為である。日常的な別れの場面では手
を振る、頭を下げる、振返るなどの行為で行い、目はむしろしっかりと見開き、再会を予期
して行く。普通ではない特別の別れが瞑目という形で行われたのである。その異常事態を表
現して「瞑目」の一語は厳粛である。そして決定的である。瞑目の主の人となりを想像させ
て余りある。また、方言を費やしても言い得ない作者の心情がこの一語から察せられる。厳
かな死である。「瞑目といふ別れ」は春の足音が聞こえる季節に起きた。悲しみをよそに弥
生という柔らかな響きが春を告げる。生きとし生けるものすべてがその訪れを待ちわび、生
命を輝かせるべく希望に満ちた弥生三月は、ある人々にはいっそう深い悲しみをもたらし、
ある人々にはわずかながら癒しをもたらしたかもしれない。その双方に自然界の廻る季節

というものを改めて考えさせたことだろう。飯田龍太とその多くの弟子および私淑するあまたの人々の慟哭を包み込んで、龍太逝去のあの年も、春はしだいに膨らんでいった。

二句目。「すでに百日」として詠まれた。「山梨県笛吹市境川町小黒坂 270」が飯田龍太の住所であった。父蛇笏の頃から境川村として知られ、町になってからも境川村は文学的地名として全国の読者から愛された。蛇笏、龍太に師事した作者にとっては一入のこと境川村は終生通して境川町とはならない地名である。「境川村」が蛇笏、龍太の作品の風土であるからである。一般の読者が「小黒坂」までは知っているかどうか。そこが「雲母」終刊後を託された作者および周辺の人々との違いである。「境川町小黒坂」は単なる地名でも住所でもなく、龍太そのものである。日本や中国では貴人を直接は名前では呼ばず、建物や住居を構えた土地の名で呼んだ。殿下、閣下、六波羅殿などがその例であるが、「境川町小黒坂」は飯田龍太の生活圏であると同時に在りし日のその人龍太そのものを指す。時は流れ季節は移ろい「すでに夏」になっていることを知り、改めて追慕の念に駆られるのである。

三句目。飯田龍太の第一句集『百戸の谿』に代表作〈紺緋春月重く出でしかな〉〈大寒の一戸もかくれなき故郷〉が収められている。龍太の忌日は二月二十五日、一周忌のその日は常にもまして亡き師への思いが募り、一日の終わり近くになって戸外に出てみたのだろう。数々の句を吟き、代表作を口ずさんでは亡き人を偲んでいたことだろう。ふと気づくと、東の空からあの月が登ってくる。〈紺緋春月重く出でしかな〉と詠まれたあの月である。そして、高みに登った月が師の句〈大寒の一戸もかくれなき故郷〉さながら村の景色を隈なく照らし出したのである。それは幻想であったかもしれないが、追慕の念が作者に見せた龍太の景色である。あたかも遺品のような全景である。

2、「三回忌 飯田龍太先生を偲ぶ会」献句

極太のペンの湯冷めのごと置かれ

金子 青銅 (「白露」21年4月号より)

「湯冷めのごと置かれ」から自ずから遺愛のペンと知れる。湯上りの心地よさは時間が経つにつれてぞくっと身を竦める湯冷めへと変わる。在りし日、ペンの主は夜の更けるのも忘れてこのペンを走らせたことだろう。書くことに生涯を費やした人の遺愛の品が作者に語りかけ、物思いを誘う。見るもの聞くものすべてが個人を偲ぶよすがとなっている中から、作者は最も故人を偲ぶ物として「ペン」を選んだ。ペンとは故人そのものである。そのペンが綴る一字一句から多くの示唆を得、その積み重ねられたものによって自らが鍛えられたことを思う。そのペン先からどれほど多くの言葉が送り出されてきたことか。重みのある言葉の数々を次々に生み出し、一つの世界——俳壇、否、文壇に多大な影響を及ぼし、あるべき方向へと導いた歴史的なペンである。「極太の」がその主義主張の質を捉えている。太く揺るぎない俳句観、文学観であったことを物語り、それ故に文字を仲立ちとして一つの世界を超えて時代の文化を牽

引したことを語る。それが、今は「湯冷めのごと」く誰一人よしとしない状況に置かれている。湯冷めを誰が喜ぶだろうか。湯上りの心地よさを肌が記憶している。肉体を温かく包み、精神に新たな命を授け、安眠へ、明日へといざなう——そのペンが太く綴る一字一句は、人の日常の健康な暮らしを支える湯浴みのようなものであったのだ。湯浴みとは健全な文学観の謂いである。遺品は飯田龍太のペン、読者は深く頷く。

なき人のこゑ朗々と梅ひらく

鈴木 豊一（「白露」21年4月号より）

声は耳に残る。臉に姿が残るように声もまた歳月を経て人の耳朶に生き続けるものである。その声を失った時こそ死者を再び、否、永遠に葬ることになる。よき声は大勢の人の耳にいつまでも残り、たとえ一旦は消えたとしても折々によみがえり、たくさんの事柄を反芻させる。声が伝えた内容の温かさや大切さ、ものの本質に迫りそれ故に厳しい意味を含むものであったりするが、それらが声の遺産として残る。声はすなわち声の主の思想である。その思想に深く感銘を受けその思想に深く頭を下げた人の耳に故人の声は「朗々と」響く。澄んでいなければよく響くことはない。澄むとは濁りなきことであり、正しいということであり、響くとは長く広く伝わることである。作者の耳にのみ故人の声が聞こえるのではなく、警咳に接した多くの耳に繰り返しよみがえってくる。梅の花は凜然とした風情で咲く。寒気の中に一輪がほころぶのは孤高の姿とも見える。毅然として美しく、近寄りがたく貴い。故人の一面をそうした梅一輪に重ね、別の一面を花の優しさに重ねて回想する。作者は角川書店刊行の『飯田龍太全集』の編集に携わった。掲句は「三回忌 飯田龍太先生を偲ぶ会」の献句である。「白露」四月号の会記は、作者の言葉として「老年の心の支えは尊敬する人を持つこと。龍太先生を尊敬する人として仰ぎ見ることができるとを改めて感謝したい」を引用している。

参考文献

- (2005)『飯田龍太全集』第1巻 角川書店
- (2009) 飯田龍太『龍太語る』山梨日日新聞社
- (2007)『飯田龍太の時代』思潮社